

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：33901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K14008

研究課題名(和文)ハインリヒ・ヴォルガストの読書教育思想とドイツ児童書運動の歴史的研究

研究課題名(英文)A Historical study of Heinrich Wolgast's thought on reading education and the german children's literatur movement from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century

研究代表者

吉本 篤子(Yoshimoto, Atsuko)

愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：80771005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ハインリヒ・ヴォルガストの思想と、19世紀後半から20世紀初頭ドイツにおける児童書運動の意義を明らかにすることを課題とした。研究者の所属大学と業務内容の変更、新型コロナウイルス関連の環境問題等を理由に、研究遂行に大幅な遅れが生じたが、以下のテーマを中心に日本国内で文献収集を進め、分析を行った。1.ハインリヒ・ヴォルガストの編纂した文学シリーズの概要 2.著作『全体的人間』の精読と分析 3.同時代の思想家との共通する問題意識の分析 以上の検討の成果を次年度に公表する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

読書の人間形成的意義はどこにあるのか。本研究ではドイツの教育者ハインリヒ・ヴォルガストの読書教育論に着目し、彼が推薦した児童書がなぜ子どもにとって重要だと考えられたのかを検討した。またヴォルガストを中心に広がったドイツ19-20世紀転換期の児童書運動の概要が同時期の改革教育運動においていかなる意味をもっていたのかを検討した。本研究は、19-20世紀転換期ドイツのいわゆるエリート層とは異なる子どもに読書がどのような意味をもつと考えられたかを明らかにする研究であり、また20世紀初頭のドイツの読書や教養、人間形成についての考えが現代にどのように引き継がれるかを検討することを可能にする研究でもある。

研究成果の概要(英文)：The objective of this investigation is revealing the reading theory of Heinrich wolgast and the movement of children's literature in Germany from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century. The analysis focused on the following themes: 1. the literary series "Quellen" compiled by Heinrich Wolgast 2. Intensive reading and analysis of the work "Ganze Menschen" 3. Analysis of reading theory and thoughts at the beggining of the 20th century.

The results are expected to be published in 2023.

研究分野：教育学

キーワード：教育史 教育思想 読書教育 児童文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「ドイツ新教育期の読書によるリテラシー形成論の思想」の研究である。ドイツ児童書運動の中心人物として知られるハンプルクの民衆学校教員ハインリヒ・ヴォルガスト（**Heinrich Wolgast, 1860-1920**）は、読書経験を単に語とその意味を理解し職業上活用すべきものとしてだけでなく、人間の芸術的経験の最も原初的なものであり、子どもの人生を変容させ、現実感覚や認識能力を高めるものであると理解していた。

児童書運動の実像の解明を試みる本研究は、教育学、文学、歴史学の諸領域にわたり、具体的な研究動向は、ドイツ新教育（芸術教育運動）研究・国語（読書・リテラシー）教育研究・児童文学史研究・ドイツ思想史研究の4分野に分けられる。

しかしながら、児童書運動の展開とその意義を解明しようとする本研究の課題意識から以上の4分野の研究蓄積を捉え直したとき、それぞれに未解決の課題が残されていた。

研究対象の偏り

日本でドイツ新教育期の児童書運動・読書教育関連の研究が少ない。新教育運動は「作業」を中心とした教育活動が推進された点に特徴があり、これまで日本での新教育運動研究も、共同体学校や田園教育舎などでの教育実践など「作業」に着目した教育改革論の研究には充実した蓄積がある。国語教育についても読本や作文教育に関する研究はあるが、これまで児童書運動や読書教育の新教育的性質が注目されてこなかった。ドイツのヴォルガスト研究にも検討が不十分な点がある。彼の読書教育論研究は主著『我が国の児童文学の惨状』（**Das Elend unserer Jugendliteratur**）や『子どもの本について』（**Vom Kinderbuch**）に集中し、最後の著作『全体的人間』（**Ganze Menschen**）は読書教育への視点が弱いとみなされているが、本研究では、この著作にある社会改良的な視点は彼の読書教育の根源を成すものととらえ、同書をヴォルガストの読書教育論の中に位置づけるべく検討を加えた。

読書教育論へ思想的アプローチの問題

ヴォルガストの読書教育論は、後年、心理学研究の発達や大衆文化への再評価のなかで批判され、彼の推薦書自体が時代遅れと指摘されるようになった。こうした批判が生じる理由の一端は、ヴォルガストの読書教育論の思想全体を視野に入れず、彼が批判・評価した作品名のみを問題視していた点にある。本研究は今日的観点から安易にヴォルガストを批判するのではなく、彼が具体的に児童書の良し悪しを批評する際に根拠としていた読書能力観や読書による変容への議論などを、同時代の文脈に位置づけることによって、「芸術性」をもつ作品の読書経験を重視する彼の「カノン」の思想的意義を解明しようとした。

「読書と教養、人間形成」論の偏りと、民衆層への読書教育論の問題

思想家による読書と教養、人間形成論は、主として市民層やエリート層を対象としており、ヴォルガストのようなドイツ民衆層の子どもの読書による成長への視点が欠けている。またヴォルガストの読書教育論について芸術教育として評価するものの社会改良的な視点は専らイデオロギー的に解釈され、時代ごとに評価と批判が行われた点に問題があった。

2. 研究の目的

本研究は、ドイツ新教育において読書と人間形成の関わりがどう理解されていたのかという問題関心にあたって、19-20世紀転換期ドイツにおける新教育期の児童書運動と成立と展開を、とくにその主導者だったハンプルクの民衆学校教員ハインリヒ・ヴォルガストの読書教育論を中心的対象として歴史的に解明することを目的とした。児童書運動の歴史的研究を通して、ヴォルガストの「教育思想」とくに子どもの読書環境への配慮、「良書」を選択する児童書批評の原則の確立、子どもに変容を与えるものとしての読書経験への着目、読書によって獲得される能力への理解の新しさ、などの思想的理解を深め、彼の教育思想が児童教育の現場でどのように受け入れられ、運動として展開したかとともに、その時代的限界の解明をめざした。

3. 研究の方法

文献調査や準備的調査によって膨大な史資料の所蔵が確認できたドイツ国内の複数の公文書館・図書館・資料館において史料収集を行予定であったが、新型コロナウイルスの影響で国外での調査を行うことが困難だった。そのため、国内からの資料収集と整理・データベース化、翻訳と精読を中心に行った。とりわけ児童書運動において従来それほど注目されていなかったヴォルガストの著作『全体的人間』（**Ganze Menschen**）の精読に集中し、ヴォルガストの読書教育論と人間形成論の関わりを明らかにすることをめざした。

4. 研究成果

本研究は、採択年度に所属大学が変わり業務が大幅に変わったことや新型コロナウイルスに関わる業務内容の増大や研究環境の変化により、当初計画していた研究を遂行することが著しく困難であった。主に文献収集と収集した資料の精読・分析を中心に行った。それらの研究は大きく以下の4つに分類される。

(1) 文学シリーズ「Quellen」を中心としたドイツ児童書運動関連の文献の収集・整理

2017 - 2019 年度にかけて特に集中的に、ハインリヒ・ヴォルガストが編纂した文学シリーズ「Quellen」の収集・リスト化を進めた。Quellenは大変薄く小冊子体のシリーズで、「ハインリヒ・ヴォルガストの児童文学批判：世紀転換期ドイツにおける読書教育をめぐって」(『研究室紀要』第37号、2011)において部分的に紹介していたが、どのような作品が収録されているかについては資料も乏しく、全体像をつかむことが困難であった。一般書、しかも児童向けの小冊子であることもあり、一般大学の図書館等にまとめて収蔵されていることはあまりない。複写も難しく、また諸事情により国外での複写・収集等に困難もあったため、比較的安価に入手できることもあり、古書を購入する形で収集を行ったため、時間がかかった。収集し、データベース化したことにより、これまで明らかにならなかった Quellen の編纂の概要を知ることができた。基本的にはヴォルガストが『惨状』で推薦していた古典作品や同時代の良書と考えられる作品のなかから、小冊子に収録できるものを選定していた。また、ヴォルガストに継いでシリーズの編集者になったオットー・ツィンマーマン(Otto Zimmermann)も基本的には同様の基準で本を選定しているが、初期の作品と同様の古典の中から編纂しなおしたものや同時代や前世紀の作品から意義あると考える作品を見つけ収録していることも明らかになった。

それ以外に、収集したうち未精読のドイツ児童書運動関連の文献をいくつか翻訳した。ハインリヒ・ヴォルガストの活動時期のハンブルク教育史に関する文献についても翻訳を進めた。また、ドイツ児童書運動の関係者の活動を整理し、年表にまとめる作業を進めた。

(2) 『全体的人間』(Ganze Menschen)の精読・分析

本研究では、ハインリヒ・ヴォルガストの児童書批評の書籍『我が国の児童文学の惨状』(Das Elend unserer Jugendliteratur)や『子どもの本について』(Vom Kinderbuch)に比べて言及されることの少なかった著書『全体的人間』(Ganze Menschen, 1910)についての精読と分析を行った。

ヴォルガストの『我が国の児童文学の惨状』(Das Elend unserer Jugendliteratur, 1896)が当時のドイツ児童文学に対する批判を主題としていたのに対し、本書はヴォルガストの教育論の思想的基礎をやや体系的に論じた著作である。ドイツ新教育運動(改革教育学運動、Reformpädagogik)の一環として、民衆学校教育の改革という視点から、ヴォルガストは実践的提言も本書の中で行っている。本書を検討することによって、『我が国の児童文学の惨状』に集中している先行研究の欠落部分を埋めるだけでなく、ヴォルガストの読書教育論をより広い教育思想の文脈に位置付けることができると考えた。本書はヴォルガストの教育論の思想的基礎をやや体系的に論じると同時に、児童教育に関して具体的提言も行っている著作である。彼の名著『我が国の児童文学の惨状』に見られる読書教育論は、従来、新教育初期の芸術教育運動の一部として位置づけられていた。『全体的人間』はヴォルガストが20世紀に入ってから特に力を注いでいた学校制度改革運動の議論にも踏み込んでいるため、従来読書教育論としてはさほど評価されていなかった。しかし本研究では『全体的人間』における人間形成論に着目することによってヴォルガストの活動をドイツ新教育(改革教育)のより広い枠組みのなかでとらえ直そうとするとともに、児童書批評そのものより広く、読書行為による人間形成論を対象とし、本書の分析を重要な研究と位置付けた。

方法としては、『全体的人間』(Ganze Menschen)のドイツ新教育における意義について検討するため、本書の重要な Spiel, Arbeit などの概念の関わりを整理し、これらの概念が読書活動を通じてどのようにはたらくのか、子どもの成長にどのような意味をもつと考えたかを整理、分析した。

以上(1)(2)については議論の整理と分析を進めることができたが、論文の形で発表するに至らなかった。2023年度中に所属大学の紀要と学会論文誌への投稿を行う予定である。

(3) 同時代の読書教育思想との比較検討

ヴォルガストの問題意識は、同時代的における思想史家による読書論と教育・人間形成という観点から検討することによって、当時が読書による人間形成についてのある考え萌芽・過渡期であったと仮説を立てた。本研究においては、ヴォルガストと同時代の数名の思想家たちの読書論や文芸批評をとりあげ、以前に行った報告「1926年「文学世界」誌の児童文学特集をめぐって：プロッホのカール・マイ論とベンヤミン」(フォーラム・ドイツの教育、2013年における報告)をさらに発展させ研究を進める予定であった。関連文献を収集することができたが、十分に検討を進めることができなかった。2023年中に収集した文献を精読し、できるだけ早く発表したいと考えている。

(4) 関連する領域について(読書、文学)の論考

その他に本研究の派生的な成果として、下記の発表成果にあるとおり、古典や児童文学の読み方についての論考や、ヴォルガストと同時代の詩文化としての劇場音楽についての論考、大学における読み書き教育に関する論考なども成果として挙げられる。児童文学の「良さ」に着目した本研究は、今日の児童文学の「良さ」「批評」についての観点を提供する。ヴォルガストの読書教育論やドイツ世紀転換期の教員らによる推薦書リスト作成の活動などは日本ではほとんど知られていないが、「子どもと古典」という論考ではひろく紹介することができた。また本研究では十分に検討することができなかったが、ドイツにおける20世紀転換期における詩文化の一般大衆の楽しみ方として大衆歌謡（音楽）の現代的展開に関する論考も発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

「いつも新しい「古典」の楽しみかた」愛知大学図書館編「韋編」44号, p.2-3, 2018年1月
「子どもと古典」愛知大学語学教育研究室 編『Aichi University Lingua』11号, p.5-6, 2018年7月
「教職課程における学生の読み書き教育実践の意義と課題 「教育問題研究」の取組の報告と考察」『愛知大学教職課程研究年報』第9号(2), p.29-43, 2020年2月

〔学会発表〕(計1件)

児童書批評と人間形成 ドイツ児童書運動とその教育学的意義(愛知大学国際コミュニケーション学会定例研究会)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕(計8件)

わたしのよむ『チョプラン漂流記 お船がかえる日』日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2018年6月号 p.36-37, 2018年6月
「新刊紹介 『はるかな旅の向こうに』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2018年8月号 p.10, 2018年8月
「教員から学生への推薦図書 『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』」愛知大学図書館編「韋編」45号, p.7, 2018年11月
「複眼批評 『つくられた心』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2019年9月号, p.40-42, 2019年9月
「新刊紹介 『徴用工の真実 強制連行から逃れて13年』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2019年12月号, p.9 2019年12月
「新刊紹介 『世界遺産知床の自然と人とヒグマの暮らし』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2021年4月号, p.7, 2021年4月
「『希望のとりこ』になれ 核兵器に脅かされない平和な未来をめざして」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2021年8月号, p.33-34, 2021年8月
「マックス・ラーベとパラスト・オーケストラ—現代に生きる20世紀ドイツ大衆歌謡—」愛知大学語学教育研究室 編『Aichi University Lingua』20号, p.4-5, 2022年12月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 吉本篤子	4. 巻 44号
2. 論文標題 いつも新しい「古典」の楽しみかた	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知大学図書館編「韋編」	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉本篤子	4. 巻 11号
2. 論文標題 子どもと古典	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知大学語学教育研究室 編『Aichi University Lingua』	6. 最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉本篤子	4. 巻 第9号（2）
2. 論文標題 教職課程における学生の読み書き教育実践の意義と課題 「教育問題研究」の取組の報告と考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『愛知大学教職課程研究年報』	6. 最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉本篤子
2. 発表標題 児童書批評と人間形成 ドイツ児童書運動とその教育的意義
3. 学会等名 愛知大学国際コミュニケーション学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

わたしのよむ『チョブラン漂流記 お船がかえる日』日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2018年6月号 p.36-37, 2018年6月
「新刊紹介 『はるかな旅の向こうに』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2018年8月号 p.10, 2018年8月
「教員から学生への推薦図書 『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウエルの教室』」愛知大学図書館編「韋編」45号, p.7, 2018年11月
「複眼批評 『つくられた心』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2019年9月号, p.40-42, 2019年9月
「新刊紹介 『徴用工の真実 強制連行から逃れて13年』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2019年12月号, p.9 2019年12月
「新刊紹介 『世界遺産知床の自然と人とヒグマの暮らし』」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2021年4月号, p.7, 2021年4月
「『希望のとりこ』になれ 核兵器に脅かされない平和な未来をめざして」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2021年8月号, p.33-34, 2021年8月
「マックス・ラーベとパラスト・オーケストラ 現代に生きる20世紀ドイツ大衆歌謡」愛知大学語学教育研究室 編『Aichi University Lingua』20号, p.4-5, 2022年12月

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------